

## 書評・Book Review

魚類学雑誌  
46(2): 126

Seahorses: an identification guide to the world's species and their conservation. S. A. Lourie, A. Vincent and H. J. Hall (eds.). 1999. Project Seahorse: x+214 pp. ISBN 0 9534693 0 1.

本書はカナダのDr. Amanda Vincent (McGill University)と、イギリスのDr. Heather Hall (Zoological Society of London)の主導によるProject Seahorse (詳細については<http://www.seahorse.mcgill.ca>を参照のこと)の一環として出版されたタツノオトシゴ属の同定ガイドである。本書にはタツノオトシゴ属の形態や生態に関する一般的な解説に加えて、種の保護やそれに関連する教育活動なども紹介されている。しかし、なんと言っても最大の特徴は、分類学的に大いに混乱していたタツノオトシゴ属(ヨウジウオ科)を世界的なレベルで整理した点にある。彼らによると、一部未解決の部分を残しているものの、120を越える公称種が32有効種に整理されるという。各種ごとの解説には、学名や一般名、シノニム、形態、色彩、生息場所、IUCNのランクなどの基本情報の他に、標徴の解説が付いた線画の全形図と、調査した標本に基づく分布図が添えられ、さらには近似種との区別点も要領よくまとめられている。ただし、各種の解説に先立って付されている検索表は、最終的に1種類に絞り込めるようにはなっておらず、複数種の候補がある場合には、それぞれの候補種の解説をすべて読まないと同定できない点は使いづらい。各種の解説には根拠となった標本の所蔵先や資料番号が明記され

ていない点は分類学者に対して不親切だが、模式標本の情報が一括してまとめられている点は評価できる。模式標本の一部は図版に収録されているが、ここまでやるならすべての模式標本を図解して欲しかった。各種に適用されている学名の出版年には誤りが散見される。例えば*H. coronatus*の出版年は1850年ではなく1847年であるし、*H. kelloggi*の出版年は1902年ではなく、1901年である。さらに、*H. hispidus*の著者は同じKaupだが、出版年は1856年ではなく1853年である。いずれにしても、本書の出版によって、日本産の種についても、適用すべき学名が変更されたり、シノニムと考えられていた名称が有効になるなど、慣れ親しんできた学名と実体の関係に変更を余儀なくされることになる。例えば*H. coronatus*(タツノオトシゴ)のシノニムとされている*H. mohikei*がキタノウミウマに適用されたり、*H. kuda*のシノニムとされていた*H. kelloggi*が有効な名称として復活したりする。ただし、どの学名にどの和名をあてるかについては、過去の経緯を十分に考慮して決定する必要があり、現在瀬能が報告を準備中である。本書は、分類学者にはもちろん、水族館関係者、ダイバーなど、タツノオトシゴ属に関わりを持つすべての人に必携の一冊であろう。なお、本書は<http://www.nhbs.com>にアクセスすれば、GBP 19.95あるいはUS\$ 32.95(いずれもpaperback)で入手できる。

(瀬能 宏 Hiroshi Senou: 〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499 神奈川県立生命の星・地球博物館)

## 図書紹介・New Publications

魚類学雑誌  
46(2): 126-127

### □ 魚類生態学

万石浦に出現する魚類の生態学的研究。一座間彰。1999。自费出版。505 pp., 88 pls. 5000円(送料込み)。宮城県にある面積6.85 km<sup>2</sup>、最大水深6 mの内湾、万石浦の魚類資源生態に関する10年間にわたる周年調査の集大成。14目57科123種が万石浦を利用し、そのうち56種が周年にわたって出現、58種が万石浦で産卵するという、各々の種の生活史が、発育、成長、成熟、産卵、性比、出現時期、移動および胃内容物の項目に分けて、豊富な図表(245図61表70付表88図版)を用いて丁寧に記載され、それらを横糸に万石浦における魚類生態系が編み上げられている。それは、魚類群集の揺りかごと

しての内湾域の重要性を強烈に主張する。88枚の図版は、514枚のスケッチによる91種についての仔稚魚の発育シリーズで、そのうちアオタナゴ胎仔とエドハゼおよびヘビハゼのシリーズはおそらく初記録。希望者には実費にて頒布、情報量からすると、5000円はタダに等しい。数に限りあり、申し込みは以下に連絡。

〒986-2135 石巻市渡波字念仏壇84-5 座間 彰 (Phone 0225-97-4893) (酒井治己)

Fish Migration and Fish Bypasses. —M. Jungwirth, S. Schmult and S. Weiss (eds). 1998. Fishing News Books, Oxford. 439 pp. ISBN 0-85238-253-7. 本書は、1996年9月にオーストリアのウィエナにある農業科学大学で開催されたシンポジウム“Fish migration and fish bypass channels”をまとめたものである。大きく4つのテーマ、1) 魚類の回遊と河川、2) 通し回遊魚の過

上通路, 3) 通し回遊魚の降下通路, および4) 遡上・降下バイパス水路の近自然デザインに区分される, 30章から構成されている。ヨーロッパ, 北アメリカでのダム・貯水池建設などによる通し回遊性魚類の個体群や群集への影響, およびそれらの弊害を回避するためにどのような遡上・降下用のバイパス水路が必要かを知るのに役立つ。研究対象の通し回遊魚はほとんどが遡河回遊魚であり, 降河回遊魚と両側回遊魚を扱った章が極めて少ないのが残念。(AG)

**カワムツの夏—ある雑魚の生態。** 一片野修. 1999. 京都大学学術出版会, 京都. 230 pp. ISBN4-87698-301-1. 2100円(税別). 本出版会からシリーズで刊行予定の生態学ライブラリーの1

冊。著者が京都大学動物生態研究室の大学院生時代に行った, コイ科の小魚カワムツの行動や個体間関係を中心とした野外での生態研究の経験と結果をベースに, カワムツの社会とはどのような総体か, またその社会をいかなる研究方法で解明してきたのかが, 本種の繁殖と摂食をめぐる個体間の関係から分かりやすく語られる。第1章の「清滝川のカワムツ」から終章(第8章)の「カワムツの社会を考える」まで, 巧みな文章運びで一気に読ませる。身の回りにいて, なわばりなどの目立った社会構造をもたない多くの動物の社会, それを野外で観察・研究することの難しさと楽しさが伝わってくる書である。既刊の「個性の生態学」(同出版会)も併せて読まれることをお勧めする。(AG)

## 会員通信・News & Comments

魚類学雑誌  
46(2): 127-128

### 国連食糧農業機構による西部大西洋の 魚類同定ガイド作成作業部会

国連食糧農業機構 (Food and Agriculture Organization of the United Nations: 略称FAO)は世界各海域の魚類を主とする海産生物の同定ガイドを作成してきた。これまでに出版された主な同定ガイドは, 西部太平洋, 西部インド洋, 西部大西洋, 東部太平洋そして南太平洋に分布する海産生物を扱ってきた。初期に出版された同定ガイドは水産重要種に重点をおいていた。このため, ハゼ類などの小型魚類や深海性魚類の属や種の説明はなく, 科の説明が手短かに述べられているだけであった。しかし, FAOは生物多様性や環境問題に配慮をするようになり, これらの魚類について比較的詳しく扱うようになってきた。実際, 1997年にマニラで開催された西部・中部太平洋の同定ガイド作成作業部会 (Workshop for Identification Guide for the Western Central Pacific)では, 水産重要種ではない魚類についても, 少なくとも属レベルの検索表を作成することが推奨された。そして, 種レベルの説明を与える例が増えてきた。

今年の7月9日から15日に中米のベリーズという大西洋に面した小国でFAOの作業部会が開かれた。今回の作業部会の目的は1978年に出版された西部大西洋の同定ガイドを大幅に改訂することであった。作業部会にはアメリカの魚類研究者が26人参加し, オーストラリアからは2人, 日本から2人(中村泉氏と私), ロシアから1人, 南アフリカから1人が参加した。また, ベリーズやカリブ海諸国から水産研究所の職員や大学院生が参加した。作業部会はKent Carpenterによって組織された。彼は,

マニラの作業部会当時はFAO職員であったが, 現在はアメリカのOld Dominion Universityの教授である。

Carpenterの部下やベリーズの水産研究者は作業部会前に現地で魚類標本を採集し, 作業部会場に集積していた。これらの標本は作業部会で使用された。FAOの作業部会は実践的な集会である。研究者は作業部会に参加する前に原稿を完成することを要求され, 事前にCarpenterに送るか, 作業部会に持参することを求められる。原稿の出来具合は, 標本とテスターと呼ばれる人たちによって試される。テスターは作業部会場に集められた標本を原稿に基づいて同定作業を行う。原稿に問題点があればテスターは原稿と校閲用紙に意見を書き込む。テスターは多くの場合, 現地の水産研究者や大学院生であるが, 今回はDave JohnsonやEd Wileyという著名な研究者もテスターとして参加していた。作業部会直前に参加を取りやめた研究者がいたため, Carpenterが彼らに参加をよびかけたのである。

原稿を改訂する作業はもう一つある。作業部会中に参加研究者は少なくとも5-6の原稿を渡され, 集中的に校閲する事を求められる。参加研究者は2班に分かれ, 一方が同定作業をテスターと一緒にいるときに他方が原稿の校閲作業を行う。したがって, 朝から夕方まで濃密な作業が続く。しかし, 作業部会前に原稿を完成していなかった研究者もいて, ノートパソコンを持ち込んで, 原稿執筆の追い込み作業をしている研究者も数人いた。この数人の研究者はマニラの作業部会のときも原稿を完成していなかった人たちで, どうやら常習犯のようである。夕食後には毎晩一人の研究者が話題提供を行った。FAO本部のPere Oliver (Carpenterの後継者)がFAOの事業について講演し, フィリピンに本部があるICLARMのRainer FroeseがFishBaseというデータベース